

物質情報学 2 (物理数学) 担当 谷村 平成 24 年度前期

ノート 4 : 非斉次定数係数線形微分方程式

Inhomogeneous linear differential equations with constant coefficients

1 線形代数方程式

m 行 n 列の行列 A と, n 次元縦ベクトル x , m 次元縦ベクトル b が与えられて,

$$Ax = b \quad (1)$$

という式にあてはまる x をすべて求めよ, という問題を考える. $b \neq 0$ のとき, これは非斉次型 (inhomogeneous) の方程式と呼ばれる.

上の方程式に比して, n 次元縦ベクトル y に対する方程式

$$Ay = 0 \quad (2)$$

を斉次型 (homogeneous) の方程式と呼ぶ. 斉次方程式の著しい性質として「解の重ね合わせ」がある. つまり, ベクトル y_1, y_2 がともに $Ay_i = 0$ を満たすならば, 任意の数 a_1, a_2 に対して $a_1y_1 + a_2y_2 = y$ とおいたものも $Ay = 0$ を満たす. 従って, 一般に, 斉次方程式の解は無数にある.

また, 非斉次方程式 $Ax = b$ にあてはまる x と, 斉次方程式 $Ay = 0$ にあてはまる y があれば, $x' = x + y$ とおいたものも $Ax' = b$ を満たす.

従って, 斉次方程式 $Ay = 0$ にあてはまる y を

$$y = a_1y_1 + \cdots + a_ky_k \quad (3)$$

という形でありつたたくさん求めておいて (このような解を斉次方程式の一般解という), 非斉次方程式 $Aw = b$ にあてはまる w を一つでもいいから求めておけば (このような解を非斉次方程式の特解という), 非斉次方程式 $Ax = b$ の一般解は

$$x = w + y = w + a_1y_1 + \cdots + a_ky_k \quad (4)$$

という形で求められる.

例題:

$$\begin{pmatrix} 1 & 3 & -4 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} = 2 \quad \text{同じことだが,} \quad x + 3y - 4z = 2 \quad (5)$$

の一般解を求めよう. まず斉次方程式

$$\begin{pmatrix} 1 & 3 & -4 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} = 0 \quad (6)$$

を考えると、この一般解は

$$\begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} = a_1 \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix} + a_2 \begin{pmatrix} 3 \\ -1 \\ 0 \end{pmatrix} \quad (7)$$

である（答えの書き方はただ一通りではない）．非斉次方程式

$$(1 \quad 3 \quad -4) \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} = 2 \quad (8)$$

の特解は、あてずっぽうでもよければ一つくらいは見つかる．例えば

$$\begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 2 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix} \quad (9)$$

はたしかに方程式 (8) にあてはまる．以上より、非斉次方程式 (8) の一般解は、非斉次方程式の特解と斉次方程式の一般解を足した

$$\begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 2 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix} + a_1 \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix} + a_2 \begin{pmatrix} 3 \\ -1 \\ 0 \end{pmatrix} \quad (10)$$

で与えられる．

演習 4-1. 上の例題の幾何学的意味を考えよ．

2 非斉次微分方程式

未知関数 (unknown function) $u(t)$ と既知関数 (known function) $f(t)$ に対し、 c_1, \dots, c_n を係数とする n 階の線形微分方程式

$$D^n u + c_1 D^{n-1} u + c_2 D^{n-2} u + \dots + c_{n-1} D u + c_n u = f \quad (11)$$

を考える． $f(t)$ が恒等的に 0 ではないとき非斉次 (inhomogeneous) 方程式という．

$$(\text{非斉次の一般解}) = (\text{非斉次の特解}) + (\text{斉次の一般解})$$

という形で非斉次方程式の一般解は求められる．前回で斉次方程式の一般解の求め方はわかったので、今回は非斉次の特解の求め方をマスターしよう．

演習 4-2. 以下の微分方程式の一般解と初期値問題の解を求めよ．まずは非斉次方程式の特解を「当て推量 (あてずっぽう)」で見つける試行関数の方法でやってみる．そのあと (この後に習う) 畳み込み積分の公式を用いて解いてみよ．

$$(1) (D^2 + 8D + 12)u = e^{3t}$$

$$(2) (D^2 + 8D + 12)u = e^{-6t}$$

$$(3) (D^2 + 8D + 20)u = \cos 3t$$

$$(4) (D^2 + 16)u = \sin 4t$$

3 非斉次微分方程式をいじってみる

一般的な解法を説明する前に，感触を得るために簡単な非斉次方程式をいくつか解いて見よう．

例 1. $Du = 1$

解： $u(t) = t + a$ (a は任意の定数であり， $Du = 0$ の一般解.)

例 2. $D^2u = 1$

解： $u(t) = \frac{1}{2}t^2 + a_1 + a_2t$ (a_1, a_2 は任意の定数であり， $u_h(t) = a_1 + a_2t$ は $D^2u = 0$ の一般解.)

例 3. $Du = f(t)$

解：両辺を積分すると，

$$\begin{aligned}\int_0^t \frac{du}{ds} ds &= \int_0^t f(s) ds \\ u(t) - u(0) &= \int_0^t f(s) ds \\ u(t) &= \int_0^t f(s) ds + u(0)\end{aligned}$$

(非斉次方程式の一般解) = (非斉次方程式 $Du = f$ の特解) + (斉次方程式 $Du = 0$ の一般解) という形になっている．任意定数 $u(0)$ は初期条件で決まる．

例 4. $(D - \alpha)u = f(t)$ (α は定数)

解：関数 $f(t), g(t)$ の積の微分に対して $D(fg) = (Df)g + f(Dg)$ が成り立つ (Leibniz rule).
また，指数関数の微分は $De^{\alpha t} = \alpha e^{\alpha t}$ である． $u(t) = e^{\alpha t} v(t)$ とおくと，

$$\begin{aligned}Du &= D(e^{\alpha t} v) = D(e^{\alpha t})v + e^{\alpha t} Dv = \alpha e^{\alpha t} v + e^{\alpha t} Dv = \alpha u + e^{\alpha t} Dv \\ (D - \alpha)u &= e^{\alpha t} Dv\end{aligned}$$

となるので，問題の方程式は

$$\begin{aligned}e^{\alpha t} Dv &= f(t) \\ Dv &= e^{-\alpha t} f(t)\end{aligned}$$

となる．これは例 3 の問題と同型であり，解は

$$v(t) = \int_0^t e^{-\alpha s} f(s) ds + v(0)$$

となる． $u(t) = e^{\alpha t} v(t)$ とおいたので， $u(0) = v(0)$ であり，

$$u(t) = e^{\alpha t} \int_0^t e^{-\alpha s} f(s) ds + v(0) e^{\alpha t} = \int_0^t e^{\alpha(t-s)} f(s) ds + u(0) e^{\alpha t}$$

が解．第 2 項 $u(0) e^{\alpha t}$ は斉次方程式 $(D - \alpha)u = 0$ の一般解 (じつは初期値問題の解) になっており，この式は (非斉次の一般解) = (非斉次の特解) + (斉次の一般解) という形になっている．

例 5. $(D - \alpha)^2 u = f(t)$ (α は定数)

解: Leibniz rule を繰り返し適用することにより,

$$\begin{aligned}(D - \alpha)e^{\alpha t}v &= e^{\alpha t}Dv \\ (D - \alpha)(D - \alpha)e^{\alpha t}v &= (D - \alpha)(e^{\alpha t}Dv) = e^{\alpha t}D^2v\end{aligned}$$

となるので, $u(t) = e^{\alpha t}v(t)$ とおくと問題の方程式は

$$\begin{aligned}e^{\alpha t}D^2v &= f(t) \\ D^2v &= e^{-\alpha t}f(t)\end{aligned}$$

となる. 解は

$$v(t) = \int_0^t ds \int_0^s ds' e^{-\alpha s'} f(s') + a_1 + a_2 t$$

となる. $u(t) = e^{\alpha t}v(t)$ とおいたので, 解は

$$u(t) = e^{\alpha t} \int_0^t ds \int_0^s ds' e^{-\alpha s'} f(s') + (a_1 + a_2 t)e^{\alpha t}.$$

二重積分の項は非斉次方程式の特解であり, 後述の方法を用いれば, この二重積分は一重積分に書き直すことができる. また, 斉次方程式の一般解は $a_1 e^{\alpha t} + a_2 t e^{\alpha t}$ となっており, これは前回の重根を持つ斉次方程式の一般解を再現している.

4 畳み込み積分

例 4 に現れた積分は, 非斉次方程式を解いたときに繰り返し現れる積分なので, 名前が付けられており, その性質も詳しく調べられている:

定義: 畳み込み積分, 結合積 (convolution): $t \geq 0$ に対して定義されている関数 $f(t), g(t)$ の畳み込み積を

$$(g * f)(t) := \int_0^t ds g(t-s)f(s) \quad (12)$$

で定義する. 積分の範囲が $0 \leq s \leq t$ であることに注意せよ.

演習 4-3. 以下の関係式を証明せよ.

- (1) $(f * g)(0) = 0$
- (2) $(f * g)(t) = (g * f)(t)$
- (3) $(h * (g * f))(t) = ((h * g) * f)(t)$
- (4) $\frac{d}{dt}(g * f)(t) = g(0)f(t) + (g' * f)(t)$
- (5) $g * (\lambda_1 f_1 + \lambda_2 f_2) = \lambda_1(g * f_1) + \lambda_2(g * f_2)$ (λ_1, λ_2 は任意の定数)

指数関数に多項式を掛けた関数もしばしば現れるので, それに対する記号を決めておく:

記法: 複素数 (complex number) α と自然数 (natural number) n に対して

$$\phi_{\alpha, n}(t) := \frac{1}{(n-1)!} t^{n-1} e^{\alpha t} \quad (13)$$

とおく . とくに ,

$$\phi_{\alpha,1}(t) = e^{\alpha t}, \quad \phi_{\alpha,2}(t) = t e^{\alpha t}, \quad \phi_{\alpha,3}(t) = \frac{1}{2} t^2 e^{\alpha t}, \quad \phi_{\alpha,4}(t) = \frac{1}{6} t^3 e^{\alpha t}, \quad (14)$$

$$\phi_{0,1}(t) = 1, \quad \phi_{0,2}(t) = t, \quad \phi_{0,3}(t) = \frac{1}{2} t^2, \quad \phi_{0,4}(t) = \frac{1}{6} t^3. \quad (15)$$

これらの記号を使うと例題 4 の結果は次のようにまとめられる :

定理 : $(D - \alpha)u = f(t)$ (α は定数) の初期値問題の解は

$$u(t) = (\phi_{\alpha,1} * f)(t) + u(0) \phi_{\alpha,1}(t) \quad (16)$$

そうすると , 2 階の微分方程式 $(D^2 + c_1 D + c_2)u = f$ など $(D - \beta)(D - \alpha)u = f$ という形に因数分解できれば , 公式 (16) を繰り返し適用することにより ,

$$\begin{aligned} (D - \beta)(D - \alpha)u &= f \\ (D - \alpha)u &= \phi_{\beta,1} * f + ((D - \alpha)u)(0) \phi_{\beta,1} \\ u &= \phi_{\alpha,1} * \{ \phi_{\beta,1} * f + (\dot{u}(0) - \alpha u(0)) \phi_{\beta,1} \} + u(0) \phi_{\alpha,1} \\ &= \phi_{\alpha,1} * (\phi_{\beta,1} * f) + (\dot{u}(0) - \alpha u(0)) \phi_{\alpha,1} * \phi_{\beta,1} + u(0) \phi_{\alpha,1} \\ &= (\phi_{\alpha,1} * \phi_{\beta,1}) * f + (\dot{u}(0) - \alpha u(0)) \phi_{\alpha,1} * \phi_{\beta,1} + u(0) \phi_{\alpha,1} \end{aligned} \quad (17)$$

といった具合に形式的に解くことができる . 後は $\phi_{\alpha,1} * \phi_{\beta,1}$ などがどんな関数になるか知っていればよい .

演習 4-4. 以下の関係式を証明せよ .

$$(公式 1) \quad \phi_{\alpha,1} * \phi_{\alpha,n} = \phi_{\alpha,n+1}$$

$$(公式 2) \quad \phi_{\alpha,1} * \phi_{\beta,1} = \frac{\phi_{\alpha,1} - \phi_{\beta,1}}{\alpha - \beta} \quad (\alpha \neq \beta)$$

上で証明した公式を繰り返し使えば , 多重の畳み込み積も , 積分を計算せずに , 形式的に計算できる . 例えば , $\alpha \neq \beta$ のとき

$$\begin{aligned} \phi_{\alpha,1} * \phi_{\beta,2} &= \phi_{\alpha,1} * \phi_{\beta,1} * \phi_{\beta,1} \\ &= \frac{1}{\alpha - \beta} (\phi_{\alpha,1} - \phi_{\beta,1}) * \phi_{\beta,1} \\ &= \frac{1}{\alpha - \beta} \phi_{\alpha,1} * \phi_{\beta,1} - \frac{1}{\alpha - \beta} \phi_{\beta,1} * \phi_{\beta,1} \end{aligned}$$

から ,

$$(公式 3) \quad \phi_{\alpha,1} * \phi_{\beta,2} = \frac{\phi_{\alpha,1} - \phi_{\beta,1}}{(\alpha - \beta)^2} - \frac{\phi_{\beta,2}}{\alpha - \beta}$$

という公式を得る .

演習 4-5. 以下の関係式を証明せよ .

$$(公式 4) \quad \phi_{\alpha,1} * \phi_{\beta,3} = (\text{自分で求めよ})$$

$$(公式 5) \quad \phi_{\alpha,2} * \phi_{\beta,2} = (\text{自分で求めよ})$$

$$(公式 6) \quad (D - \alpha) \phi_{\alpha,1} = \frac{d}{dt} \phi_{\alpha,1} - \alpha \phi_{\alpha,1} = 0$$

$$(公式 7) \quad (D - \alpha) \phi_{\alpha,n} = \phi_{\alpha,n-1} \quad (n = 2, 3, 4, \dots)$$

注意：三角関数 (trigonometric functions) は

$$\cos \omega t = \frac{1}{2}(e^{i\omega t} + e^{-i\omega t}) = \frac{1}{2}(\phi_{i\omega,1} + \phi_{-i\omega,1}), \quad (18)$$

$$\sin \omega t = \frac{1}{2i}(e^{i\omega t} - e^{-i\omega t}) = \frac{1}{2i}(\phi_{i\omega,1} - \phi_{-i\omega,1}) \quad (19)$$

と表される。

注意：畳み込み積分の計算は面倒で間違いやすい。積分計算は避けて、なるべく(公式1)、(公式2)を活用し、すべて代数演算だけで済ませた方が間違いにくい。

以上をまとめると、2階微分方程式の初期値問題の解(17)は、 $\alpha \neq \beta$ の場合、

$$u = (\phi_{\alpha,1} * \phi_{\beta,1}) * f + u(0) \frac{1}{\alpha - \beta}(\alpha\phi_{\beta,1} - \beta\phi_{\alpha,1}) + \dot{u}(0) \frac{1}{\alpha - \beta}(\phi_{\alpha,1} - \phi_{\beta,1}) \quad (20)$$

$\alpha = \beta$ の場合、

$$u = (\phi_{\alpha,1} * \phi_{\alpha,1}) * f + u(0)(\phi_{\alpha,1} - \alpha\phi_{\alpha,2}) + \dot{u}(0)\phi_{\alpha,2} \quad (21)$$

となる。つまり、

$$\begin{aligned} & (\text{与えられた初期条件 } u(0), \dot{u}(0) \text{ を満たす非斉次方程式の解}) \\ & = (\text{初期条件 } u(0) = \dot{u}(0) = 0 \text{ を満たす非斉次方程式の特解}) \\ & \quad + (\text{与えられた初期条件 } u(0), \dot{u}(0) \text{ を満たす斉次方程式の解}) \end{aligned}$$

となっている。初期条件に合わせる必要がなく、たんに一般解を求めたいだけなら、

$$\begin{aligned} (D - \beta)(D - \alpha)u &= f \\ u &= (\phi_{\alpha,1} * \phi_{\beta,1}) * f + c_1\phi_{\alpha,1} + c_2\phi_{\beta,1} \quad (\alpha \neq \beta \text{ の場合}) \quad (22) \end{aligned}$$

$$u = (\phi_{\alpha,1} * \phi_{\alpha,1}) * f + c_1\phi_{\alpha,1} + c_2\phi_{\alpha,2} \quad (\alpha = \beta \text{ の場合}) \quad (23)$$

を公式として用いてよい。

畳み込み積を用いたこの解法は面倒だが、機械的に計算すれば必ず答えが出る方法である。これ以外も非斉次方程式を解く方法は、試行関数法(答えの形を推定して、未定係数の入った関数を解の候補を作り、微分方程式に代入し、その関数が本当に解になるように係数を決める。答えを出すにはこの方法が一番早い)、定数変化法(形式的には最も一般的な方法、定数係数ではなく関数係数の方程式に対しても使える)、ラプラス変換(かえって計算が面倒になる方法であり、あまりお勧めできない)など、いろいろある。一つの方法だけに頼らずに、問題に応じて適切なやり方を見い出せるようになってほしい。

演習 4-6. 以下の微分方程式の初期値問題を解け．ただし，最終的な答えは実数のみを使って書き表せ．また，最終的な答えを書くときは $\phi_{\alpha,n}$ という記号は使わず， e^{2t} , $\cos 3t$ といった形で解をできるだけ具体的に書け．

$$(1) (D - 3)u = e^{2t}$$

$$(2) (D - 4)u = e^{4t} + 6e^t$$

$$(3) (D - 3)u = t + 5t^2$$

$$(4) (D^2 + 10D + 24)u = e^{-3t}$$

$$(5) (D^2 + 10D + 25)u = e^{-3t}$$

$$(6) (D^2 + 10D + 29)u = e^{-3t}$$

$$(7) (D^2 + 9)u = \cos 2t + \sin 3t$$

$$(8) (D^2 + 9)u = t \sin 3t$$

$$(9) (D^3 - 7D^2 + 14D - 8)u = e^{3t} + e^{4t}$$